

まちから、ちから。38

くらし・まちづくりコーディネーター

ジャーナリスト 齋藤 喜以子

はじめの1歩

2年前、市が主管する団体の主催で、「月3万円ビジネス」をテーマとする講演会が行われた。仕事は奪い合うのではなく分かち合うという精神で、いいこと・楽しいこと・地域のためになることを仕事にしようという話に、会場は大

東北一広い面積を有する人口13万人の山形県鶴岡市は、かつて庄内藩の城があった城下町で、日本海に面した穀倉地帯の庄内平野、山岳信仰で知られる出羽三山など、豊かな自然と文化に恵まれた土地柄だ。一方、少子高齢化が進む中、若年層の流出が進み、地元定着が課題となっているという。今回は、「働く＝雇用」という発想を転換し、「仕事は自ら創出するもの」という考え方で、地域資源を生かす小さなビジネスに取り組む女性集団「鶴岡ナリワイプロジェクト」を取り上げる。



ナリワイ起業した女性たち



地域資源をイメージした「鶴岡ナリワイプロジェクト」のロゴ

「好きなこと×いいこと」を

ナリワイにする女性たち

鶴岡ナリワイプロジェクト

(山形県鶴岡市)



代表の井東敬子さん。「1人のスタープレイヤーより、普通の100人が各々一歩進むことが大事。女性たちが一歩を踏み出す仕組みをつくりたい!」と語る

の自然体験型環境教育に携わってきた専門家。豊かな資源に恵まれながら、新たな一歩を踏み出せず、若者の流出も止められない地域の状況を目の当たりにし、これまでの経験やノウハウを生かして地域課題を解決したいと考えた。

いに沸いた。しかし、残念ながら、その後、行動に移す人は1人もいなかった。「新しいことを始めるのが怖いから」の理由で。

そこで、今回紹介する『鶴岡ナリワイプロジェクト』代表・井東敬子さんの登場となる。5年前に家族で東京から鶴岡に移り住んだ井東さんは、旅行会社やNGO職員として、数々

実は、この地域では、ほとんどの母親が働いているが、「働くとは、雇われること」だと思っており、契約更新の時期になると、次の仕事が決まらない不安な日々を過ごしている。この様子を井東さんは、「将来を自分で決められない状況に甘んじてはいないか」と感じた。そこで、地域に活力を生み出すには、これまでの固定観念を払拭し、「自分から動かなくて



地方都市での働き方、暮らし方について熱く語り合う「実践道場」



「小さな起業に興味のある人」を対象とした「入門コース」



小さな手仕事を人に教える人「ちくちくらぶ」



放置された柿の木の手入れと、無農薬柿の葉茶を製造販売する「柿守人」



女性の体に優しい布ナプキンを製作販売する「ルナリズムプロジェクト」

次々誕生した「ナリワイ」

- トランスバレント・ルーム(切り絵)
- 工房げるぐど(イラスト、看板製作)
- まゆときぬ(鶴岡シルクを使った下着やよだれかけ)
- 工房 器用万歳(消しゴムハンコ)
- 野の花～field flowers～(野の花のアレンジメント)
- 柿守人(柿の葉茶)
- ルナリズムプロジェクト(布ナプキン)
- 針仕事～ちくちくらぶ(かぶりもの作成・手仕事の指導)など

お母さんはカッコイイ！

は、地域は何も変わらない。ほしい未来は自分で創ろう！」と周囲に呼びかけ、昨年、市の事業の一環として、地域の女性たちを対象に、小さなナリワイ(スモールビジネス)を生み出す取り組みを開始した。

参加者は、「好きなこと×地域に役立つこと」

を探し、月2〜3万円の小さなビジネスとして成り立つ仕組みを考え、実践する。その経験を持ち寄り、月1回、対話型ミーティングを行った結果、初年度にもかかわらず8名の女性が起業した。このプロセスで、これまで起業には無関心だと思っていた女性たち(20代後半〜40代)の関心が高いことがわかり、誇りを持って働く母親の姿を見た子どもからは、「カッコイ

イ！」という嬉しい声も届いた。

2年目の今年4月、さらに前進するため『鶴岡ナリワイプロジェクト』を設立。市や財団の支援を得て、「ナリワイ起業」を応援する2つの講座を開設した。「入門コース」は、やりたことを実現するためのきっかけ・仲間・アイデアがほしい人のための気軽なコース。年間を通じて、ナリワイづくり講習会や事例研究・ワークショップを開催する。

「実践コース1/実践道場」は、本気でナリワイを起業したい女性が10か月間、仲間と学ぶコース。「実践↓ふりかえり気づく↓プラン練り直し↓改善して実践」を繰り返して、参加者同士が支え合う仕組みをつくり、1年後の起業をめざす。「実践コース2/事務局ユニット」は、自分のスキルを生かし社会の役に立ちたい

多様な働き方をめざして

今後の展開について井東さんは、「メンバー内で経験を共有する仕組みをつくり、女性が複数の仕事を掛け持ちする働き方(多様性)を地域に定着させたい」と語る。また、事務局ユニットが動き出す2年後を目途に拠点を設け、「女性たちの働く場」とすると共に、家にもりがちな乳幼児を抱えた母親のたまり場になりたい」と、次のイメージを描いている。

今後は、事務局は3名体制、参加者は20名、具体的な起業は後掲参照)